



Rainbow ~伝統を繋ぎ煌めく未来へ~

「節目」、「けじめ」をつけることは大きな成長につながります。

節分というと2月3日と思いがちですが、今年は暦の関係で2月2日(日)が節分でした。2021年にも節分が2日であり、このときは、明治30年(1897)以来、124年ぶりのことだったようです。今年からは2021年から4年ぶりの2日です。

節分とは季節を分ける節目で、1年に4回あります。暦上の四季が変わる前日を言います。春から夏になる立夏、夏から秋に変わる立秋、秋から冬になる立冬、そして冬から春に変わる立春それぞれの前日です。

現代では、立春の前だけを節分といいます。その理由は、四つの季節の中でも、一年のはじまりである「立春」が最も重要視されていたからのようです。江戸時代以降、「節分」といえば立春の前日のことを呼ぶようになったといわれています。さて、節分に豆をまく風習ですが、季節の節目である節分、特に立春には鬼が出やすく災いをもたらすと考えられ、鬼を寄せ付けない、追い払うために、魔除けの力をもつ豆をまいて鬼を退治するためです。豆まきの豆には、穀物の中でも霊力が宿っているといわれる大豆を使います。豆が「魔滅(まめ)」、豆を煎る「魔の目を射る」という語呂合わせなどから大豆を煎って使うのが一般的のようです。落花生をまく地域もあるようです。

ところで節といえば竹を連想します。竹は節ができてどんどん伸びていきます。そして、その節があるからこそ、強い風や雪の重みにも折れることなく、たわみながら耐えることができるといわれています。背骨もある意味節のように一定の長さの骨がつながってできています。そのことにより、体の重みを支えつつ柔軟に曲げ伸ばしができます。

このことを生活や人生に置き換えて考えると、様々な節目が想起されますが、その節目を大事に、一定期間における自己のありよう、行動、態度を振り返り、よきことは継続し、改善するとよいことは改めて、新しい節目への移行に際してそのことを意識して生かしていけば素晴らしい人生が送れることと思います。

竹のようにしなやかに、伸び伸びと、心身共に成長できるとよいですね。

読書をする人だけがたどり着ける場所がある。朝読週間にしっかり本を読もう！

読書する人
だけが
たどり着ける場所



毎日情報に触れているのに知識が深まらないのは、なぜか？
【読んだ本の数で人生は変わる】

『読書する人だけがたどり着ける場所』 齋藤孝 著 SB新書

読書を推奨する本はたくさんありますが、若者向きで大変読みやすいです。人生の幅を広げ、よりよい生き方を目指すにはやはり読書が重要だということが容易に理解でき、すんなり入ってきます。情報としての読書、人格としての読書という考え方はわかりやすく、インターネットを見ることとの違いが明確です。本の紹介や読み方の手ほどきもあり参考になります。

テレビもなければインターネットもない遠い昔は、情報はもっぱら活字による紙媒しかありませんでした。そのため、知識を得るために、自分を高めるために、社会の様子を知るために等、他にも様々な理由や必要性に迫られて読書にいそしんだことが想像できます。活字を読むこと、読書をするものの価値はかなり高かったと思います。それが、現代のように手のひらサイズのスマートフォンで、あらゆる情報が得られるようになると、読書の価値や必要性が相対的に低くなることは想像に難くありません。しかし、スマートフォン等の端末で容易に情報を得ることができて知識は増えますが、知能が高まったり、知性が磨かれることにはつながらないように思います。

吉田松陰先生は次のように言うておられます。

「読書最も能（よ）く人を移す、畏（おそ）るべきかな書や。」

意味は、読書は人を大きく変える力がある。本の力は偉大であるということです。読書の効用はたくさんあります。下にその具体を紹介します。

- ① 会話力や文章力が高まる。
- ② ボキャブラリー（語彙）が増える。
- ③ 教養や知識が増える。
- ④ 想像力が豊かになる。
- ⑤ アイディアが得られる。
- ⑥ 話題が豊富になる。
- ⑦ 読書の世界に入り、ストレスが解消される。

本は友達です。
手に取れば、叱らず、笑わず
知りたいこと、大事なこと、必要なこと、様々なことを教えてくれます。
楽しませ、癒やしてもくれます。
いつもそばに一冊の本を。

心を育み、脳を活性化する読書

下の本は、第23回電撃小説大賞（選考委員奨励賞）を受賞しており、興味を引かれて読みました。人との関係性を大事にすることと、相手を愛することについて考えさせられます。自分を大事にできなければ、他人を愛せないそんなことも感じさせます。



『ひきこもりの弟だった』 葦舟ナツ 著 メディアワークス文庫

引きこもりの弟だった主人公が、偶然出会った女性から唐突に3つの質問を受けて、その答えが女性の意に沿い結婚することから物語が展開します。主人公の過去と現在の様子が、交互に描かれて深い心の煩悶や自分にも隠してきた愛情に関する問題が表面化してきます。一筋縄でいかない人への愛や関係性について考えさせられます。